

Negative Reaction 1

- ※ 以下本編本文より抜粋
- ※ このサンプルであなたのお持ちの環境での表示を確認できます。
- ※ サンプルも成人向けです
- ※ サンプルは無料ですが、著作権はとりさんにあります。特に部分を切り取っての再配布は絶対にして下さい。
- ※ 本編は七章構成。作品本文約一万字弱。

ロクちゃんの僕を見る目、今から思うと三年生で同じクラスになった頃から変だった。気がつくところからか僕を見ている。教室の窓際で、中休みに本を読んでる僕を。トイレから出たら、出口ですれ違ったこともある。もしかしたら、教室から僕のあとを追いかけてきたのかも知れない。

ロクちゃんの顔つきがすぐ暗くなって、それまで一日だって休まなかったのに、ポツポツ学校を休んだり、遅刻するようになったのが、年生の二学期頃だった。僕はもともとロクちゃんとも口も利かないし、あまり顔も見ようとしなかったけど、ふと廊下で振り返ってロクちゃんとも目が合ったとき、その目が暗くてきつくて、何だか刃物で刺されたような気がして、僕は気がついたら脇の下に冷たい汗をかいていた。

でも、七月に入って、相変わらず昼休み、窓際で本を読んでた僕の肩を、ロクちゃんが叩いた時から、僕の「日常」は大きく変わってしまったんだ。

「こんなええ天気の日に教室で読書か？」
「何か用？」

僕は淡々と返したつもりだったけど、おびえていた。肩に手を置いたロクちゃんには、にやにや笑って僕を見下ろしてた。横縞のランニングシャツから、よく陽に焼けた肩が剥き出しで、光っていた。

「健康にええ運動させたるから、来いや」

「遠慮しとくわ」

ロクちゃんは後ろにいた三人の男子にあごで合図した。僕は脇を二人に抱えられて、ばたつかせた半ズボンから出た足も、揃えてもう一人に押さえられた。

「いややて！ 何すんの！ 離してやっ！」

シャツがお腹が全部出るまでまくりあげられた。僕は目を開いた。僕のデニムの半ズボンのボタンに、ロクちゃんの手がかかっていた。

「いやっ！ いやあッ……！」

僕は力一杯身を振ったけど、腕が抜けそうに痛んで、すぐ動けなくなった。それに誰か一人でも手を離したら、

「いややったら、俺らのドレイになれ、ええか!？」

「今日は、自分でやってみい」

僕はロクちゃんがやるみたいに、指でおちんちんの先の方をつまんで、ゆっくり皮をめくって、戻す。少しずつスピードを上げる。もう痛くなかった。かわりにジリジリって痺れる気持ちよさが、体を貫いていくんだ。

冷たい水が、僕のおしりに入ってきた。

「やあ、やあ、何したん？ やめて……」

「まだ終わりとちやうねん」
冷たくて暗い声だ。僕は凍りついた。

続きは本編で！